

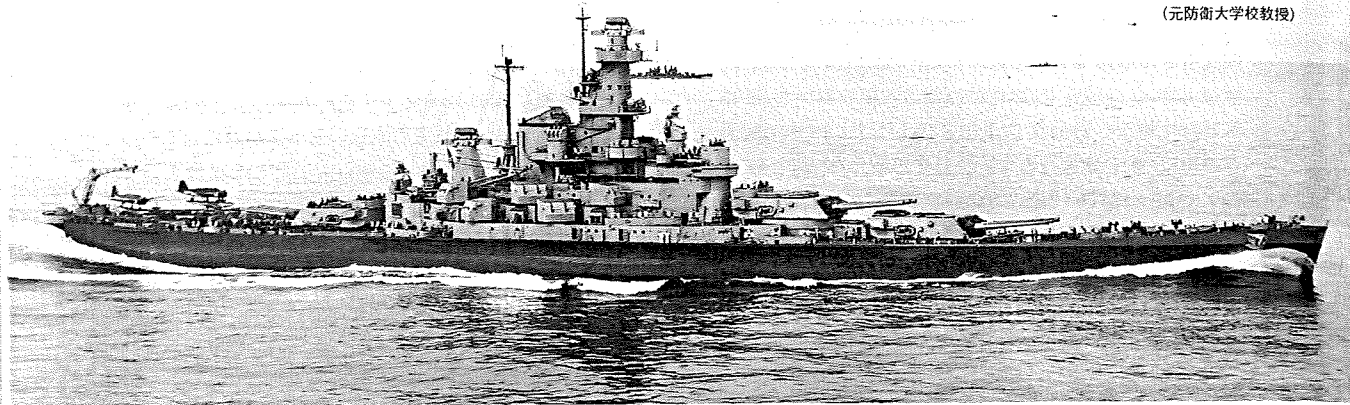
米「新戦艦」の戦歴

WAR EXPERIENCES OF U.S. NEW BATTLESHIPS

by Yoichi Hirama

平間 洋一

(元防衛大学校教授)



1943年8月、機動部隊の一翼を担って西太平洋を進撃するインディアナIndiana BB-58。(U.S.NAVY)

開戦からガダルカナルまで

日本海軍がハワイで8隻の戦艦を一撃で撃沈破、マレー沖では最新鋭の英戦艦プリンス・オブ・ウエールズ Prince of Walesを撃沈し、航空機の時代が始まったことを示したが、米海軍は終戦まで、12隻（2隻は終戦で中止）の戦艦を造り続けた。しかし、これら戦艦が完成した時には、戦艦はすでに主役の座を降りており、日米海軍が30年以上にわたって描き続けてきた、戦艦対戦艦の艦隊決戦はついに生起することはなかった。そして、かつては「海の王者」と呼ばれた戦艦には、想像もしなかった空母や船団の護衛、陸上支援射撃などの低次元の任務が課せられ、脇役の地位に甘んじて太平洋戦争を終えた、というのが一般的な見方であろう。

しかし条約型の35,000トン型戦艦、すなわちノース・カロライナNorth Carolina級2隻とサウス・ダコタSouth Dakota級4隻の、太平洋戦争中の戦いを詳細に見てみると、常に対日反攻作戦の最前線に航跡を残している。以下、軍縮条約解消後に建造された条約型新戦艦6隻の戦いの軌跡を追ってみよう。

これら条約型新戦艦は、それまでの米戦艦とは異なり高速化（28ノット）したが、第2次ロンドン軍縮条約の制限を受け35.6センチ砲搭載の35,000トンで設計し、同条約のエスカレーター条項を用いて急速40.6センチ砲に変えたため、設計時から制約を負っており、その後建造されたアイオワIowa級に比べると速力および防御力に問題があった。

真珠湾が奇襲された1941年12月8日、米海軍はワシントン条約の枠内で保有が認められていた15隻と、いわゆる条約明け後に竣工したノース・カロライナ級2隻の合計17隻の戦艦を保有していた。そして、太平洋艦隊には比較的新しいメリーランドMaryland BB-46、ウエスト・ヴァージニアWest Virginia BB-48などの9隻、大西洋艦隊にはドイツ海軍が弱体なことから、比較的古い艦を主体に8隻を配していた。しかしハワイで瞬時に8隻が沈没あるいは大中破し、ピュージェット・サウンド海軍工廠で修理中のコロラドColorado BB-451隻を除き、太平洋の戦艦部隊は壊滅してしまった。しかも、第1次ヴィンソン計画による1937年度艦のノース・カロライナBB-55、ワシントンWashington BB-56が就役したとはいえ慣熟訓練中であり、スターク計画による1938年度艦のサウス・ダコタBB-57とインディアナIndiana BB-58は艦装中、アイオワ級の1939年度艦と40年度艦4隻はいずれも船台上にあった。

米海軍は太平洋艦隊の弱体を補うために、翌年1月にニューメキシコNew Mexico BB-40、ミシシッピMississippi BB-41、アイダホIdaho BB-42の3隻を太平洋に回航したが、これら戦艦は空母を護衛するには低速であり、東京空襲、ミッドウェー海戦、珊瑚海海戦などまでは空母の護衛には巡洋艦が当たっていた。

その後、1942年5月にワシントン、6月にノース・カロライナ、8月にサウス・ダコタ級の1番艦サウス・ダコタ、11月に2番艦インディアナ、翌年2月に3番艦マサチューセッツMassachusetts BB-59、8月に4番

艦のアラバマAlabama BB-60が竣工し、太平洋に回航された。そして、これら新戦艦の回航に符合するかのよう、米海軍の反攻作戦が8月7日のガダルカナル上陸作戦から始まった。この作戦を支援するためノース・カロライナは空母ホーネットHornet CV-8を護衛中であったが、9月15日にエスピリッツ・サント付近で酸素魚雷による「トバッチリ」的被害を受けてしまった。すなわち、空母ワズプWasp CV-7を狙って発射した魚雷6本中3本はワズプに命中したが、3本が外れてワズプの北方5哩を航行中だったノース・カロライナにそのうち1本が命中、艦首に9.5×5.4メートルの破口を生じ、5名が戦死し20名が負傷する災難ともいえる被害を受けたのである。

幸いトンガ諸島に配備されていた工作艦の応急修理を受けてハワイに帰投できたが、1万メートルも離れた別の目標を狙った魚雷が命中するとは誰も考えず、命中させた伊19潜もこの戦果を知らなかったし、モリソン戦史も同一海面に配備されていた伊15潜の魚雷と記している。

一方、姉妹艦のサウス・ダコタも10月26日の南太平洋海戦に参加したが、この海戦でホーネットを失い、護衛していたエンタープライズEnterprise CV-6が小破され、自艦も1発ではあったが被爆し、さらに30日には潜水艦（虚報）を回避しようとして駆逐艦マハンMahan DD-364と衝突するなど、新戦艦の初陣は余り芳しいものではなかった。

ガダルカナルからマリアナまで

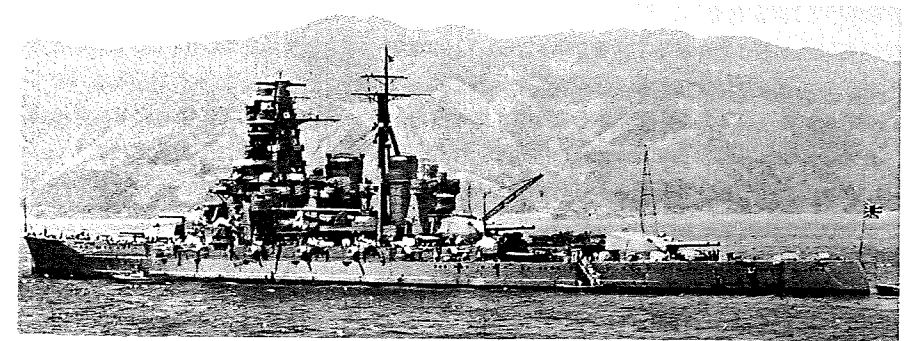
日米海軍の戦艦が初めて矛を交えたのは、1942年も終わろうとしている11月12日から始まった第3次ソロモン海戦であった。この海戦はガダルカナルのヘンダーソン飛行場を砲撃するために突入した戦艦霧島、重巡愛宕、高雄、軽巡長良、川内、駆逐艦9隻を迎撃するために出動したワシントンとサウス・ダコタとの間で、11月14日夜半に生起した。この戦いで米海軍は駆逐艦3隻を失い、さらにサウス・ダコタが霧島の探照灯に捉えられ、42発も被弾し上部構造物をほとんど破壊され、戦死38名、負傷者60名を出して敗退した。しかし、僚艦のワシントンが肉眼による視界外からレーダーにより正確な射撃諸元を得て、

40.6センチ砲75発と12.7センチ砲107発を発射し、命中弾40.6センチ弾9発と12.7センチ弾40発、射撃時間7分で、霧島に大火災を起こさせて沈没に追い込んだ。この海戦が日米海軍が演練を重ねてきた戦艦対戦艦の、また日本海軍が得意としていた夜戦の結末であった。日本海軍には陸上射撃に備えて徹甲弾を準備していなかったという不運はあったが、日本海軍は「闇夜の鉄砲」のレーダーという技術力の前に敗北し、ソロモン海で比叟に続いて霧島を失ったのであった。

ガダルカナル撤退後、ソロモンをめぐる戦いは日本側の敗色が深まる。さらに1943年5月にはアッツ島を失い、9月にはラエ、サモアから撤退するなど日本軍の敗北は続き、11月21日にはギルバート諸島（マキン、タラワ）への上陸作戦が開始された。この作戦にはアラバマ、ノース・カロライナ、サウス・ダコタ、インディアナなど新戦艦6隻のすべてが参加したが、米軍の最初の強襲上陸作戦であったため、錯誤も多く戦死者が3,406名も生じたことから、議会で追求されるなど多くの問題を残した。

しかし、マキン、タラワの攻略作戦が計画より短期間で終わると、ニミッツ大將は余勢を借りて1943年1月には、マーシャル群島（ケゼリン環礁）の攻略作戦を開始し、この作戦にはスプルーアンス中将指揮の高速空母9隻を護衛するため、新戦艦6隻と開戦後に建造したアイオワ級2隻も加わった。また上陸部隊を支援するターナー中将の指揮する第51機動部隊には、護衛空母8隻と旧式戦艦7隻が参加した。

そしてマキン、タラワの上陸作戦では支援射撃が不十分であった戦訓を生かし、まったく平坦な珊瑚礁のケゼリン環礁に対して、インディアナなどの戦艦部隊が8日間にわたり、40.6センチ弾2,549発、35.6センチ弾4,260発、12.7センチ弾23,808発と、日本側守備兵8,782名（戦闘員は約3,000名）一人当たりに換算すると4発の砲弾を撃ち込んだ。ちなみに投入された鉄量のトータルは爆弾300トン、砲弾5,300トン（艦砲4,000



1942年11月、第3次ソロモン海戦で米新戦艦ワシントンWashington BB-56の手で沈没へ追い込まれた日本戦艦霧島。

トン、陸上砲1,300トン)であった。

マーシャル群島の攻略が予想以上に好調であったため、急速エニウエトク環礁の攻略が追加され、この作戦の障害となるトラック島に対する空襲が1944年2月17日と18日に実施され、新戦艦6隻も空母部隊の護衛として参加した。一方、航空偵察でトラック環礁内に武蔵、長門、扶桑などが在泊中との情報を得たスプルーアンス中將は、これら戦艦との交戦を予想し、重巡インディアナポリスIndianapolis CA-35から戦艦ニュージャージーNew Jersey BB-62に将旗を移して戦いに臨んだ。

しかし、連合艦隊は無線通信の増加から空襲が近いことを知って脱出した後であり、捕捉し撃沈できたのは、空襲前日に日本へ向かった輸送船と、それを護衛していた練習巡洋艦香取と駆逐艦舞風だけであった。

マーシャル諸島を占領しトラック島を無力化すると、2月にはブラウン環礁を占領、戦艦部隊に守られた空母部隊は、3月28日には西カロリン諸島のパラオ、ヤップを空襲したが、4月21日には南下してニューギニアのホーランドアヤアイタペ上陸作戦、次いで4月29日と30日には北上して再びトラック島を襲撃した。

続いて6月11日には、日本軍が絶対国防圏としていたマリアナ諸島(サイパン、グアム、テナン)の攻略作戦が開始され、この作戦には高速空母15隻、新型戦艦7隻からなるミッチャー指揮の第58機動部隊、上陸部隊を支援する護衛空母17隻と旧式戦艦7隻からなる第51機動部隊が参加し、これを迎え撃った小沢治三郎中將の機動部隊(空母9隻、戦艦5隻)との間で日米航空決戦が展開された。しかし、この戦いは「マリアナ沖の七面鳥狩り」とアメリカ海軍に揶揄されるほどの日本側の惨敗で、航空機約300機を失っただけでなく、多くのパイロットを失い、日本海軍を再起不能にしまった。

これに比べてアメリカ側の損害は空母ワズプ(2代)CV-18に爆弾1発、バンカー・ヒルBunker Hill CV-17に1機が突入し、運悪くエレベーターからハンガーデッキに落下したため、1名死亡、73名負傷の被害を受け、戦艦部隊もサウス・ダコタに爆弾1発が命中し、24名が戦死、27名が負傷し、インディアナが軽微な損害を受けた程度であった。そして、占領されたサイパンやテナンには10月12日には第21戦略爆撃軍団が進出し、11月24日からB-29による日本本土の爆撃が開始された。

一方、戦艦部隊は第38機動部隊の空母を護衛して、10月6日から12月24日にかけては沖縄、台湾、マニラを、12月30日から2月26日には台湾、サイゴン、香港、海南島、ルソン島、沖縄、南西諸島、東京を空襲するなど無人の野を行く殲滅戦に東奔西走していた。これら部隊に対して日本海軍も反撃を試みたがほとんど成果なく、戦艦の作戦行動を阻害したのは、タラワ攻略作戦中のミ

シッピの弾薬搭載中の火薬庫の爆発、ケゼリン攻略作戦中のワシントンとインディアナの衝突事故などでしかなかった。

レイテから硫黄島まで

次に米軍が定めた攻撃目標はフィリピンで、攻略作戦は1944年10月17日のレイテ湾入口のスルアン島上陸から開始され、新旧戦艦12隻が参加した。日本海軍も「捷号作戦」を発動し、残存全兵力を投入して迎え撃った。

航空兵力を失った日本海軍苦心の作戦構想は、ハルゼー中將の指揮する高速空母部隊を、小沢治三郎中將指揮の四部隊が北方に誘導した際に、栗田健男中將が指揮する大和、武蔵以下の主力水上部隊がサンベルナルジノ海峡を通り北方から、西村祥治中將の率いる第3部隊の戦艦山城、扶桑、重巡最上と駆逐艦4隻、それに志摩清英中將の指揮する重巡2隻、軽巡1隻と駆逐艦7隻が南方からスリガオ海峡を北上してそれぞれレイテ湾に突入し、輸送船団を攻撃する計画であった。

この四部隊にハルゼーは小沢艦隊を求めて北方に「野牛の突進」をし、上陸部隊を護衛するキンケードの戦艦部隊は、南方から接近する西村部隊を迎え撃つため南下したことから、レイテ湾には船団を守る部隊がなく、もし栗田艦隊が突入していれば揚陸中の船団部隊に大きな損害を与えるはずであった。また、もしハルゼー艦隊が北方に釣り上げられていなかったならば、レイテ湾口で米新戦艦対大和型の対決が生じた可能性もあった。しかし、栗田艦隊がサンベルナルジノ海峡で謎の反転をしてしまったため、世紀の日米新戦艦の対決は幻に終わり、レイテ湾の輸送船団も救われた。

史上最後の戦艦対戦艦の決戦は、真珠湾から引き揚げられたメリーランド、テネシーTennessee BB-43、カリフォルニアCalifornia BB-44など6隻の旧式戦艦と、西村艦隊の旧式戦艦山城、扶桑との間で10月24日夜に行なわれたが、日本海軍は何ら損害を与えることなく、山城、扶桑と駆逐艦3隻を失い、最上が大破し完敗している。しかし、この日米戦艦の決戦を詳細に見てみると、扶桑を撃沈したのは魚雷艇や駆逐艦(29隻)の魚雷であり、山城を撃沈したのも駆逐艦と巡洋艦(重巡4隻、軽巡4隻)の砲火で、戦艦部隊は228発を発射したが、巡洋艦部隊の後方に位置していたため、22,800ヤードの遠距離レーダー射撃であり、新型射撃指揮装置を装備したウエスト・ヴァージニア、カリフォルニア、テネシーとミシシッピの4隻しか発射できなかった。しかもミシシッピは「射撃止め」の下令後に1斉射を打ってしまったという「駆け込み発射」であり、ペンシルヴェニアPennsylvania BB-38に至っては目標を捕捉さえできな

かった。

1945年2月19日から始まった硫黄島上陸作戦には、ミッチャー指揮の第58機動部隊(空母16隻)に戦艦8隻が参加したが、硫黄島攻略作戦ではテネシー、ネヴァダNevada BB-36、テキサスTexas BB-35、アイダホなど、6隻の旧式戦艦が専門の陸上射撃支援部隊として編成され、3月6日には1日で総計45,000発を撃ち込んだ。

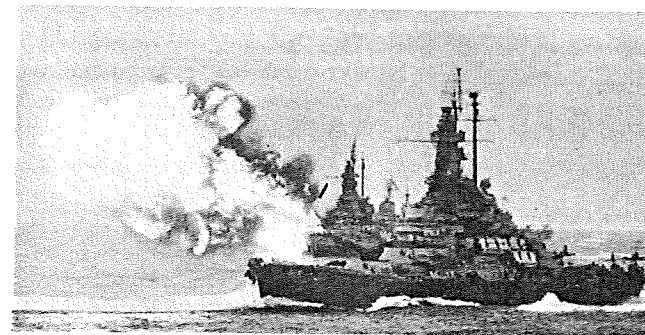
硫黄島が四周から砲撃できる地形であったため、昼夜や天候に影響されることなく、常時艦艇を配備し、陸上部隊の要求によって支援射撃を継続し、26日間の戦闘で米軍は約4万トン、日本側守備兵一人当たり2トンの砲弾や爆弾をわずか20平方キロの小島に投入した。

沖縄から敗戦まで

1945年4月1日に沖縄上陸作戦が開始されたが、参加兵力は第58機動部隊が空母18隻、戦艦10隻、第57機動部隊が空母4隻、戦艦2隻、第51機動部隊が戦艦11隻、護衛空母18隻で、合計23隻に及ぶ戦艦が空母や船団の護衛、陸上射撃などに投入された。しかし、被害は特攻機命中2隻(ミズーリMissouri BB-63 2回、インディアナ1回)に過ぎず、損害は事故による方が大きかった。すなわち、サウス・ダコタは弾薬搭載中に砲塔内で爆発事故を起こして死亡11名、負傷24名、ノース・カロライナは対空戦闘中に味方駆逐艦の12.7センチ砲に打たれて、3名死亡、44名負傷の被害を出した。このように、戦闘による被害よりも事故が目立つほど、日本の戦力は弱まっていたのであった。なお、沖縄作戦には英新戦艦キング・ジョージ5世King George Vも参加した。

沖縄を攻略すると米軍の矛先は本土に迫り、3月には艦載機により呉、神戸、南九州などが空襲されたが、7月に入ると爆撃に加えて戦艦の艦砲射撃も加わった。7月14日にはサウス・ダコタ、インディアナとマサチューセッツが釜石に2,355発、15日にはアイオワ、ミシシッピ、ウィスコンシンWisconsin BB-64が室蘭に860発、18日にはノース・カロライナ以下5隻とキング・ジョージ5世が日立に1,499発、29日には浜松に1,845発、8月9日には再び釜石に4,790発と、これら戦艦部隊は総計1万1,349発の砲弾を日本本土に撃ち込んだ。

日本にはこれに対処する兵力がなく、この砲撃の約1カ月後には涙を吞んで、ミズーリ艦上で降伏文書に署名した。なお、降伏調印式は最初はニュージャージーで行なう予定であったが、トルーマン大統領がミズーリ州の出身であったことから急速変更されたという。



1945年7月、釜石に艦砲射撃を行なうアラバマAlabama BB-60(手前)。

日本各都市に対する米艦砲射撃の発射弾種と弾数

都市名	40.6cm弾	20.3cm弾	15.2cm弾	12.7cm弾	総計
釜石	802	728		825	2,355
室蘭	860				860
日立	1,207		292		1,499
浜松	810	1,035			1,845
釜石	850	1,440		約2,500	4,790
総計	4,529	3,203	292	約3,325	11,349

なお、第2次大戦中に大西洋に展開された条約型新戦艦は、ワシントン、ノース・カロライナ、サウス・ダコタ、アラバマとマサチューセッツの5隻であったが、主要な作戦は大西洋や北海での船団護衛であり、戦いらしい戦いはマサチューセッツが参加した北アフリカ上陸作戦程度であった。この作戦でマサチューセッツは、1942年11月8日にカサブランカに泊中のフランス新戦艦ジャン・バールJean Bartと砲火を交え大破させたが、これが大西洋で米新戦艦が40.6センチ砲を発射した最初の戦闘となった。

またドイツ海軍が弱体であったため、大西洋に派遣された戦艦部隊には華々しい海戦よりも、事故や不遇の方が目に付く。英本國艦隊を補強するために派遣されたワシントンに乗艦中の第39任務部隊指揮官ウィルコックス少将が出港翌日に行方不明となってしまった。アメリカの記録には心臓発作による海中への転落と書いてあるが、飛び込み自殺の可能性を否定することはできない。さらに、不運なワシントンはムルマンスク行き船団を護衛中に、キング・ジョージ5世が衝突して沈めた駆逐艦の搭載爆雷の爆発により、射撃指揮装置やレーダーなどを破損するという事故にも遭遇している。

●参考文献

Naval Historical Center, ed.Operational Experience of Fast Battleships: World War II, Korea, Vietnam(Naval Historical Center, 1989)
Navy Department, ed.,Dictionary of American Naval Fighting Ships (U. S. Government Printing Office)